

兵庫歴博蔵「淡路名所図会」について(2)

―「淡路四草」との関係―

藪田 貫

はじめに

令和四年（二〇二二）度、ひょうご歴史研究室に「大阪湾岸と淡路の地域史」研究班（大阪湾岸班と略称）が組織され、相前後して「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトがスタートしたことで、「国生みの島」淡路の歴史研究にあらためて関心が集まっている。わたし自身は、研究履歴上の接点がなく、まったくの未知の世界であったので、なおさら淡路の歴史研究の奥深さを感じている。

その一方、博物館長という立場からは、開館四一年を迎えた歴博（兵庫県立歴史博物館）の事業実績が、この機会に大きく更新されている印象を強く持つ。とくに本誌七号に元学芸員神戸佳文氏が寄せた論考「淡路島文化財総合調査と成果集成について」（二〇二三年）には、わたしが

知らなかった歴博の総合調査（一九八八年から二〇〇〇年に実施）、とくに淡路に関する調査の成果と問題点が率直に記されており、興味深いものであった。

氏の論考は、「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト第一期の成果として『淡路島文化財総合調査報告書』が発刊されるにあたって記されたものであるが、昭和五八年（一九八三）の開館時から平成三〇年（二〇一八）での定年退職まで長年、歴博に在籍した氏のキャリアーなしに、この一文は生まれなっただろう。合わせて退職後の同氏を、大阪湾岸班の研究員に迎え入れたことも大きい。その結果、歴博で進められた新旧の淡路研究が接ぎ木されているのである。

その接ぎ木、別の表現を用いれば、更新（いま風に言うならアップデート）は、当館蔵の『淡路

名所図会』についても言えることが、本誌に収めた氏の最新稿「兵庫歴博蔵『淡路名所図会』について」で明らかである。

とくに『淡路名所図会』は、兵庫県への寄贈者が洲本市ゆかりの直原玉青画伯（生誕一二〇年に当たり、洲本市立淡路文化史料館で回顧展が開催中）であることも手伝い、館蔵品として早くから注目を浴びている。とくに地元淡路からの公開を望む声が多いと聞くが、島内の寺社や景物・名所を描いた絵図集である以上、往時の景観を知りたい人々の熱い思いを引き起こすのは蓋し、当然である¹⁾。伝統ある淡路地方史研究会の機関紙『あわ



図1 『あわじ』表紙

じ』が、第一号以降、毎号の表紙を曉鐘成『淡路国名所図絵』所収の画像で飾っているのは、その現れである（図1）。

その一方、『淡路名所図会』と題された本作品は、明快な書名にもかかわらず序文も跋文もなく、制作背景はもちろん、編著者・画家の正体も明らかでない、という複数の謎に包まれている。俗に言うならば、「有名な」割には身辺が「疑わしい」のである。当然、謎解きをしたいと思うのは人の常であるが、問題は、その手掛かりである。幸い、島内の郷土史家をはじめとして先人の指摘があるが、共通しているのは「淡路四草」との関係である。

淡路四草とは、仲野安雄の『淡路常盤草』（八冊、享保一五／一七三〇）、藤井容信・彰民の『淡路草』（二七冊、文政八／一八二五）、渡辺月石『堅磐草』（二三冊、天保三／一八三二）、小西友直・錦江『味地草』（冊数未確認、安政四／一八五七）を指し、著者は下級武家と上層農民の違いがあるが、島内の文人である点で共通する。淡路の地方史研究を主導した武田清市氏は、こうした相次ぐ地誌の編纂を「淡路の近世文化の庶民的な特色」と指摘し

ている（兵庫県立歴史博物館『海と山と花の国淡路の歴史と文化』二〇〇〇）。

その反面、四草のどれ一つも出版されておらず、すべて写本で存在しているのも特徴である。その結果、淡路地誌の代表的地位を大坂の人暁鐘成と松川半山が作成した公刊本『淡路国名所図絵』五冊（嘉永四年、序文）に譲ることとなっている。そこには「播磨鑑」など同じく写本でしか残されていない播磨の地誌との共通点が指摘できるが、大坂の出版資本と組んで、絵入り本地誌を出版することは容易ではなかったことを意味する。

以下、神戸氏の論考を受け、この間の調査をもとに私見を記す。こ叱正いただければ幸いである。

一、「淡路名所図会」について

さて館蔵の「淡路名所図会」については、『兵庫県立歴史博物館館蔵品選集』（平成四（一九九二年））に大略、つぎのように紹介されている。

・江戸時代淡路の地誌は、「淡路艸」・「淡路常盤

草」・「堅磐草」・「味地草」などを数えるが、名所図絵は少なく、『淡路国名所図絵』（嘉永四年）のみであるが、「淡路名所図会」は肉筆（紙本墨画淡彩）で内容も全く異なる。

・序文・跋文がなく、編者も不明で、文中の記載から成立は一八世紀末から一九世紀前期と考えられる。

・内容が寺院・神社・古城・廃寺・名勝・旧跡・景観など多岐にわたり、見開き二頁に細かく描写され、名所を紹介する図会の枠を超えている。
・裏打ちを行った際に、天地が若干裁断されている。

・第一帖・第二帖は三原郡、第三帖は三原郡と津名郡、第四帖・第五帖は津名郡を扱う。

概ねその通りであるが、いくつか補う必要があるので、箇条書きで記す。

①資料点数は三〇一点あるが、沼島や洲本が無いなど欠落がある。その原因は本来、一枚のバラバラの絵図であったものを繋ぎ合わせて折本五帖にしたことで、その際、手元になかった場所

は空白となっていると思われる。その意味で本作品は、完成された書名を思わせる『淡路名所図会』でなく、「淡路名所絵図集」と名付けるのが適当である。

②その後の調査で、同種の絵図が八点、徳島城博物館に所蔵されていることが判明し、精査の結果、沼島や洲本八幡など欠落部分であることが分かった^②。さらに城博本には「阿波国文庫」という蔵書印（朱印）が捺されており、無印の歴博本ともともと一体であったものがある時期、行き別れになったと推測される。城博本は、広げると絵図面に六折の折り目が入り、畳むとほぼ正方形の画帳になり、その表面中央に「洲本八幡境内之図」などの題名付箋が張り付けられていることなどが新たに判明した。おそらくこの形状が、「淡路名所絵図集」の原型であったと思われる（図2）。

このことは「淡路名所絵図集」に改編する過程で、原図に手が増えられたことを意味するが、繋ぎ合わされた「淡路名所絵図集」を仔細に観察す

ると、折り目の跡が見え、さらに裏紙の一部、取り外れた細長い題箋が付けられたものも確認された^③。さらに天地や左右の紙幅をカットしている跡も見え、六折の原図を改変する際に生じた処置と判断できる。館蔵本のサイズはタテ一七・四センチ、ヨコ二三・三センチであるが、城博本的一点「洲本八幡境内図」は二七・六センチ×ヨコ四〇・三センチとはるかに大きい。原図の整形なしには「淡路名所絵図集」とならぬ。

こうして『淡路名所

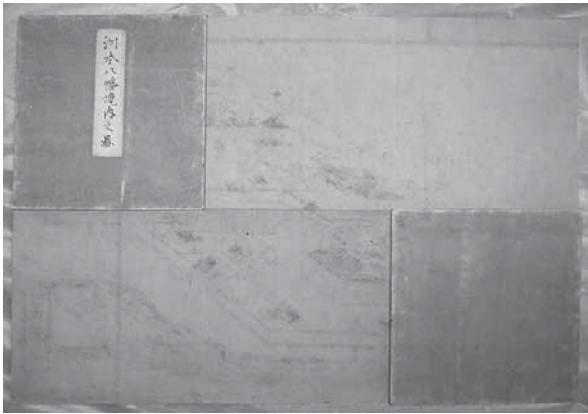


図2 名所絵図の折り目（個人蔵）

図会』は本来、淡路の名所を一点ごとに描いた折本絵図（ほぼ正方形）が原図であることが判明した。^④

原図から『淡路名所図会』への改変を表示するならば、つぎの通りである。

単一の折本絵図（ほぼ正方形）↓五帖への改変
「淡路名所絵図集」↓「淡路名所図会」

絵図の箱書が玉青画伯の師である矢野橋村画伯によるもので、『都名所図会』などの作者竹原春潮齋の作であると書かれているので、最後の名づけは、この時と思われる。その前に、五帖の「淡路名所絵図集」への改変がされなければならないが、それを誰がやったのかは不明である。憶測を逞しくすると寄贈者の直原玉青師画伯ではないかと思われるが、その場合、画伯の下に折本原図が集まっていなければならない。「阿波国文庫」印をもつ徳島城博本よりもはるかに多い原図が淡路島内に残されていたので、それが玉青画伯の下にもたらされた、という筋道が普通に考えられるが、それ以前に誰が持っていたのかを知る手掛かりはない。

最大の謎は作者・絵師である。筆致が同一であることから、作者は同人と思われるが、歴博本と城博本合わせて三〇〇点を超える作品が、何時、誰によつて、どういう目的で描かれたかを知る手掛かりを、絵図自体のなかに見出すことはできない。

二、『淡路名所図会』と平野安澄

当館蔵の『淡路名所図会』は、平成一二年（二〇〇〇）四月から六月、洲本市立淡路文化史料館で開催された特別展「海と山と花の国淡路の歴史と文化」で陳列された。同名の図録が出ているが、じつはこの展示、地元淡路での二度目のお披露目であった。初回は、昭和六二年（一九八七）七月から八月の間、兵庫県立淡路文化会館で開催された「ふるさとの特別展―淡路四草とその前後」展である。件の『淡路名所図会』が、兵庫県から当館に移管される前のことである。

この特別展については幸い、実行委員長であった菊川兼男氏が、『あわじ』第五号で、その経緯

を含め、淡路四草に触れている（『淡路四草とその前後』一九八八）。目配りの効いた卓論で、武田清市氏同様、「近隣諸国に比べても、藩政時代に淡路郷土誌の出現が早く、また多いのは何故か」と問うた上で、つぎのように解答している。

淡路は津名・三原の二郡で、洲本府と二四浦・二四四村を数え、領国としての規模が小さいので、一人で調査できること。藩主の御膝元ではないので専門的職業的学者が少ないが、余技的趣味的学者が多く、そういう文化人の好心が、自由な立場で郷土愛の現われといえる郷土誌を著した。

その上で、僧碧湛と『淡国通記録』、井内光孝と『淡州神社考』、仲野安雄の『淡路常盤草』と『重修常盤草』、未見の『淡国一覽』、藤井容信・彰民と『淡路草』、渡辺月石と『堅盤草』、小西友直・錦江と『味地草』、晁鐘成と『淡路国名所図絵』に到る地誌の流れを、陳列品の紹介よろしく作成年代順に論じている。さながら展示風景の壮観さ

が目に見え、なかでも注目されるのは菊川氏が、『重修常盤草』と『淡路草』の中間にあって、両者をつなぐ役割をしているのが不一房松花こと平野安澄の業績である」として、平野安澄を特別に取り上げていることである。

その上で、『淡路名所図会』の作者は竹原春潮齋ではなく、不一房松花平野安澄の著作である。『味地草』の挿絵は、『淡路名所図会』からの借用である」と断定していて、読んでいたわたしを驚かせた。

ここで初めて『淡路名所図会』の作者が推定されたが、その理由として、『淡路名所図会』には古城跡を多く取り上げ、しかも城跡削平地の実測をしているが、その解説文が『胞州誌』と同じである場合が多いことを挙げている。

なによりも注目されるのは平野安澄（一七五二～一八一）の経歴である。彼は、洲本城下に住む図画師・印判・彫刻師で、四草に含まれない地誌『胞州誌』『淡州誌』などの作者として知られ、とりわけ「御國中歴覽日記」（津名・三原郡各二冊）を挿絵付きで著すなど、島内を実地見分して

いることが決定的に重要である。『淡路名所図会』に収められた三〇〇点を超える絵図は、現地を巡らなければ得られない果実であり、安澄には、それを証言する史料が存在する。

その一つが「御國中歴覽日記」で、未見であるが、島内巡見の記録であることは明らかである。さらに挿絵が入るなど絵図情報も含まれているとされ、今後の調査が期待される。

いま一つが、安澄の作品『淡州誌』（洲本市立淡路文化史料館・古東家旧蔵）に見える巡見記事である（図3）。



図3 張貫絵図史料（冒頭〔 〕部）

○天明六丙午年二月、国命に依て張貫絵図大さ十二間半に二間半形、数三十三枚、日数三百七十四日にして成就、洲本松屋伊之助（号は不一房名は安澄）国命を奉じて造之、始末六年半にして皆成

天明六年（一七八六）に一〇代藩主治昭の命を受け、絵図の作成に着手したとあり、六年半とすれば寛政四年（一七九二）の完成となる。その巨大な張貫絵図については『淡路古今紀聞』（安部喜平編、明治一六年）に、「張貫淡州一国 凡六年半、此内巡覽村々三百六十九日」と、長期に及ぶ島内巡見の日数が記されている。

また『味地草』には、器方人松花として紹介があり、「見聞春秋」など生涯を通じて著した書冊は四三巻とあるが、くわえて寛政二年、藩主治昭の淡路巡見に供奉したことが記されている。『阿淡年表』によれば、同年四月に治昭は江戸を立ち、五月に帰国、十一月に洲本の稲田邸に出かけている。その途次の巡見であれば、安澄の経歴と一致する。その際、藩命で「淡島一州の巒岳高低山里平村の形象を洩粘を以て紙張、是を製し、五彩を

施し、山林池川田圃各村の広狭の分界悉」を制作したとあり、大きな絵図の形状と内容が窺える。

もちろんそれは『淡路名所図会』の原図ではないが、島内の巡見、藩主命での絵図の作成、長期の制作時期などを勘案すると、彼こそ、三〇〇点を超える『淡路名所図会集』の原図の作者に相応しいだろう。

最終的な判断をするには、著者名の確実な「御国中歴覧日記」との比較検討が必要である。

三、『淡路草』『淡路名所図会』と『味地草』

菊川氏はもう一点、『味地草』の挿絵は、『淡路名所図会』からの借用であると主張している。この点の検証にあたっては、地誌写本間の継承関係を検討する必要がある。それぞれの写本には序文が付けられており、それを考察した新見氏の解題によると、文政二年（一八二九）、小西友直（二七八九〜一八四九）は、所蔵する『淡路草』の写本を一代藩主斉昌に献上するに際し、調査不十分な箇所が多いことに気付き、「今までの所

説をよく参考にし、淡路の各村浦へ直接出向き、実地について大著述を思い立った」という。

つまり『味地草』は、先行する地誌『淡路草』の改定を念頭に進められたが、重要なのは友直が、文政八年（一八二五）に成った藤井彰民（一七六六〜一八二二）の作品『淡路草』の写本を持っていたことである。この年、五九歳の彰民に対し、後進の友直三六歳という年齢差であるが、先輩の地誌写本をもつことは、後輩にとって地誌改定の前提条件であったことを物語る。

後輩の友直にとって、地誌改定、つまり『味地草』制作の前提には、『淡路草』のほかにもう一点、前提があった。それを示唆する記述が、彰民のもう一冊の地誌、なんと『淡路名所図会』と題されているが、その序文に見える。

当館蔵の作者不明の『淡路名所図会』とは別に、彰民作の『淡路名所図会』と題する地誌があったことに驚いたが、幸い、洲本市立淡路文化史料館所蔵の安部家本としてあったので直接、確認することができた。

序文の末尾には「藤井彰民勤職」として朱文・

白文が据えられている(図4)。年次は文政丁丑とあるが、この干支は文政年間になく誤りと思われ、付言には「五年前文政乙酉ノ歳」に『淡路草』を著したとあるので、正しくは文政己丑一二年(一八二九)となる。

注目されるのは付言で、『淡路草』一五巻は、一〇〇年前の仲野安雄の『常盤草』を受けた作品として著したと、ここでも彰民が仲野の『常盤草』写本を持っていることが前提とされている。いわば淡路四草は、リレーの第一走者から第二走者にバトンが渡されるように、筆者の間を写本が引き継がれて出来ているのである。

ところが彰民自身、『淡路草』には不備も多く、

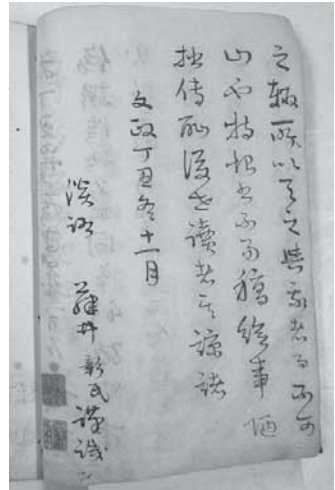


図4 彰民署名

「恥ヲ後世ニ残ス」ものだと判断し、続編を考えたが、その際、近年、「平野安澄ノ画ル山川寺社数多ヲ見ルニ、未ダ、淡路草ニモ写サズ」ということから、『淡路草』に平野安澄の絵を収録しなかつたことを悔い、「安澄ノ画」を愚筆で写し取り、合わせて一書(五冊本)とすることで、『淡路名所図会』を著した、と言う(図5)。

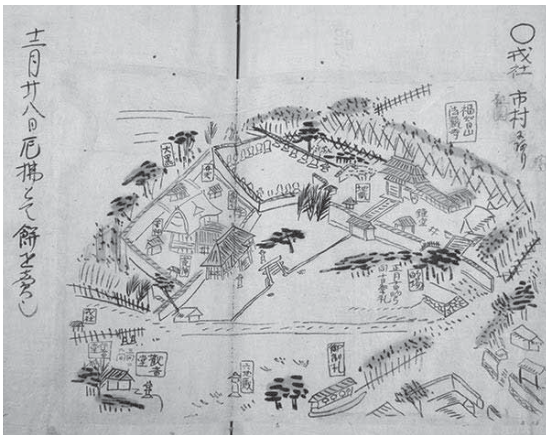


図5 彰民『名所図会』の一部

文政己丑一二年（一八二九）当時、すでに平野安澄はこの世にいない。しかし彰民は、彼の絵を写すことで自作の『淡路名所図会』に取り込んだということだが、他者のオリジナルの絵を後続の地誌編者が利用する、という予想外な関係がここには見える。

そればかりか彰民の『淡路名所図会』の付言にはさらに続けて「画ノ拙キハ余ノ及ハサル所、若シ好事ノ人アリテ巧ニ写取リナンコトモアラハ僥倖」と述べ、平野安澄の原画が、藤井のみならずさらに他者に利用されることが予想されている。もし、それが小西友直であれば、菊川氏の言うように『味地草』の挿絵は、『淡路名所図会』（歴博本）からの借用である」と断言するのも可能である。

ちなみに両者の重複が可能なのは、彰民の『淡路名所図会』が巻一古事・古書、巻二神社、巻三寺院・津名郡、巻四寺院・三原郡・墳墓・古壘、巻五瀑布・名木・奇石・名所・古器と項目別であるのに対し、友直の『味地草』は村ごとに記し、全く構成が異なるからである。いずれにしても平

野安澄の原画を、藤井彰民と小西友直がともに利用しているとなれば、淡路四草の關係に新しい事実が示されたことになる。

彰民の『淡路名所図会』の付言には「国生みの島」淡路には自おのこ凝島・絵島などの名所があるが、未だ図絵の書がなく、天明・寛成の間に安澄が藩命を受け、画図をたくさん描いたにもかかわらず、誰も利用していないので、拙い絵筆を自分が取った、と書き、いまは亡き安澄の遺作を継承し、生かそうとする姿勢が見える。つまりは平野安澄の描いた絵図の存在が、淡路の地誌に挿絵を入れる方向性を決定づけ、それを彰民と友直が受けたことで淡路の地誌の絵画化が進んだ、と理解することができる。

その時、彰民と友直の二人は、平野安澄のどんな絵を写したのであろうか？

そこで注意されるのは、菊川氏が「一房松花の子孫に当たる洲本松本家に『味地草』の原画と思われるものが残されている」と記している点である。果たしてその原画、特別展「淡路四草とその前後」開催を準備する過程で発見されたことが、

昭和六二年（一九八七）七月五日付『読売新聞』淡路版に報じられている。「江戸後期の地誌「味地草」挿絵の原画見つかる」と見出しの付いた記事で、平野安澄の家系である松花堂書店の松本よしゑさんが保存していた古文書・掛軸の中から発見されたものである。

奇しくもこの原画、松本家から寄託され、現在、歴博にある。その点数、一〇〇点余に及ぶが、図版で示すように特徴がある(図6)。それは第一に、着色でなく墨彩であること。第二にタテ二四・二センチ、ヨコ三三・二センチの規格であること。そして第三に、見開き左右が枠取りされていることである。

これは私見に拠れば、版木を組む際の元図版と思われ、写本として利用するものではない、と判断される。

ちなみに『味地草』については、名著出版から戦後、刊行された復刻版五冊が唯一のもので、知られているのはすべて写本である。複数の写本が存在するように菊川氏は、名著出版本が東大史料編纂所本を採用したことに関し、「東大影写本は

欠本が多すぎる」と指摘し、広田本一七秩五五冊がもつとも優れた写本であるから、それを底本としておれば、「体裁といい、読み易さといい申し分なかったのにといい思いを禁じ得ない」と述べている。

たしかに淡路四草は、すべて写本で残されて



図6 松帆浦（松花堂本）

いるので、底本選びは、復刻の生命線でもある。名著出版本の底本とした写本は、明治二十一年（一八八八）、修史局編修長重野安禪らが採訪したもので、三原郡役所原蔵本を謄写したものである。津名郡・三原郡それぞれ四冊で、その後補遺が追加され五冊となっている（洲本市蓮華寺本を底本として追加）。

同書の「刊行にあたって」には、三原郡の部は大正一三年（一九二四）、津名郡の部は昭和四年（一九二五）、それぞれの教育委員会の手で復刻版（孔版・ガリ版）として、刊行されたことを注記している（三原郡は六巻本と三巻本、津名郡は四巻本）。そのうち三原郡三巻本と津名郡四巻本が、歴博に所蔵されているが、名著出版の復刻本と異なり、写本が異なる故だと思われる。

館蔵謄写版『味地草』（各教育委員会の下で、教員を動員し、孔版刷りで制作されたもので、挿絵はきわめて不正確である）には、経緯が記され、小西友直・錦江によって安政四年（一八五七）完成された『味地草』は、正本が藩庁に献本されたが、明治四年（一八七二）の廃藩置県後、それぞ

れの郡役所に下付され、さらに郡役所の正本をもとに「篤志家の写本」が生まれたとある。

良質の写本とされる広田本は、その一つと思われるが、それ以外にも複数の写本があったのである。ちなみに菊川氏は原本を『三原郡史』編纂中に一部、閲覧したと記している。

これら写本との比較が不可欠だが、たしかに館蔵の原画は復刻版『味地草』と一致する挿絵が少なくない。小西友直が、たしかに不一房松花の原画を写して利用したとして、それが松花堂書店から出た図版（松花堂本）と同じとは言えない。むしろ、写本ばかりの淡路四草に加え、安澄の図版をもとに版木が作られ、刷り物としての地誌、文字通りの「淡路名所図会」が刊行される準備が整っていたと思われる。すなわち安澄の原画をもとに、真正正銘、版本の『淡路名所図会』が発刊される可能性があったと推測しておきたい。

おわりに

以上、わたしの乏しい調査歴をもとに館蔵『淡

路名所図会』とその周辺について考察を加えてきたが、『淡路名所図会』の寄贈に続き、『味地草』の原画とされる松花堂本（松本家資料）が寄託されるなど、貴重な史・資料が地元淡路から歴博に集まっている。

貴重な資料を受けた以上、その調査研究は不可欠であり、さらに成果を展示として公開することも重要な責務である。平成一二年（二〇〇〇）の特別展「海と山と花の国 淡路の歴史と文化」開催から、四半世紀が過ぎようとしている。

その最中に、歴博の中にひょうご歴史研究室ができ、さらに「大阪湾岸と淡路の地域史研究」班（大阪湾岸班と略称）が発足したことは、つぎの展示開催に向けての準備であると言うこともできる。小論では淡路四草、とくに挿図・絵図に終始したが、安澄が切り開いた城跡（古城の縄張）図の検討、島内に残る古文書など有形文化財の最新の調査など、更新するべき課題は多い。⁵⁾

淡路三市と歴博との固い連携の下、引き続き、淡路の歴史研究が進められることを願って、小論を閉じる。⁶⁾

【付記】

本稿を成すに当たっては、徳島城博物館・徳島大学附属図書館・洲本市立淡路文化史料館ならびに兵庫県立歴史博物館での調査が前提となっている。調査にご協力いただいた根津寿夫・平井松午・金田匡史・竹内信・福永明子の各氏に心からの謝意を表する。

(1) 淡路地方史研究会発行の雑誌『あわじ』三二号に会員の定本義弘氏が、率直な思いを述べている。『淡路名所図会』は姫路市所在の兵庫県立歴史博物館に事前に電話予約すれば有料で閲覧できるが、遠隔地であり、洲本市立淡路文化史料館等淡路島内の公共施設への移管が望まれる。(二〇一五年)

(2) 『大坂の陣・淡路加増四〇〇年展』(二〇一五年)の図録に紹介されたことから、令和五年八月、根津寿夫館長の協力を得て調査した。阿波国文庫とは、明治維新後に華族となった旧藩主蜂須賀家に引き継がれた資料を収めた文庫を指しており、「淡路名所絵図集」の原図が一部、旧藩で引き継がれ、大半が淡路島内に残されたこ

とで、『淡路名所図会』として現在、見ることできているのである。『味地草』のように藩に献上されたのち、廃藩後に地元郡役所に下賜されたものと伝来の過程が異なることに注意される。

(3) 歴博学芸員竹内信氏と「鳴門の渦潮」調査プロジェクト臨時職員福永明子氏が実見するなかで発見された。その仔細は報告書『鳴門の渦潮』と淡路島の文化的景観』に収められている。

(4) なお歴博本『淡路名所図会』には「方図」と題する図版が一部、収められている(仁項方図・第二帖)が、『味地草』にも「江井浦方図」(第一冊)とあり、共通している。これについては徳島城博物館に「岩屋浦方図」ほか数点が残され、「岩屋浦方図」には天明七年二月一三日改、と見分年月日が添えられている。

また徳島大学附属図書館にも「淡路国方図」が一点、所蔵されており、制作事情は不明だが、こうした公式資料も利用されていることに留意する必要がある。

(5) 古文書で言えば、『味地草』などの地誌に収録されている貴重史料の再発見が続いている。南あわじ市法蔵寺蔵の天正九年豊臣秀吉禁制は本誌第七号に前田徹論考として、沼島の蜂須賀家

政制札は本号に竹内信論考として、それぞれ掲載されている。

(6) 文中にも触れた部分もあるが、管見の範囲で写本・刊本情報を記しておく。ただし未確認情報も含むことに留意。

仲野安雄著『重修淡路常盤草』八冊 原本 徳島県立図書館仲野文庫

平野安澄著『御国中歴覽日記』津名郡二冊・三原郡二冊 一宮町松本鎮雄氏蔵

同『胞州誌』孔版 二冊 昭和一二年 洲本市立淡路文化史料館(古東家旧蔵)

同『淡州誌』写本 二冊 洲本市立淡路文化史料館(古東家旧蔵)

藤井彰民『淡路名所図会』写本 五卷(うち一卷欠) 洲本市立淡路文化史料館

小西友直著『味地草』写本 広田本 一七帙 五五冊

安部喜平著『淡路古今紀聞』刊本 二冊 明治一七年 大阪文敬堂 洲本市立淡路文化史料館